



藤井の『国防婦人会 日の丸とカッポウ着』(1985年)は、第一次資料を駆使して戦争と人びととの関係を浮き彫りにした。

国防婦人会の活動が、

ひとつの「お祭り」になってゆく……

私は研究の柱を、いかに民衆が戦争とその支援に動員されていたかということへ集中していきました。
国民がいつのまにか戦争支持にまわるというメカニズムは一体何なのか、それをできるだけ客観的に追究してみたのが国防婦人会の研究です。
…(ここで)…戦地にひっぱられていく兵士を送り出すやり方が、ひとつのお祭りに形式化していく凄さを感じます。
(鹿野政直との対談より)。「戦後歴史学と戦争研究」第二巻収録)

現代史に解決を与えることで、

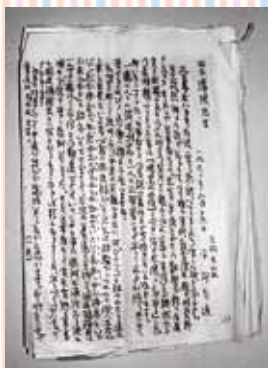
私たちは、「いま、このときの存在」を確かめ、
未来に生きることを保証される――

私は、現代史は、研究の対象であるばかりでなく、
現に生きているというところに特徴がある、と思います。
そして、その中に私たち自身も生きているのです。
……私たちは、現代史に解決を与えなければなりません。
それが、「いま、この時の存在」を確かめ、
未来に生きることを保証するものである、と思います。
(一九七二年三月一日、内田知行宛書簡より)。「藤井忠俊の現代史研究の軌跡」第二巻収録)



藤井忠俊 (ふじい・ただとし 1931―2018)

民衆史研究者。『国防婦人会』『兵たちの戦争』『在郷軍人会』を世に問い、「現代史の会」主宰を松本清張より引き継ぐ。アカデミズムによらず民衆史の立場から新しい現代史研究を再構築した。日記、書簡、手記など膨大な一次資料を丹念にあたり、そこに内在する論理を「読み解く」藤井の鋭利な手さばきは、同時に人間への温かい共感を満たされている。本書作集は『季刊現代史』所収の戦争研究の成果、松本清張作品の分析、さらに自らが経営した保健文化社発行の雑誌「健康管理」所収の医療と衛生に関するエッセイなど、広範な藤井忠俊の業績を一挙に集成。



「帝銀事件」の平沢貞通から松本清張宛の手紙。
「日本の黒い霧」をはじめとする清張の「史眼」は、藤井らの「現代史の会」に大きな影響を与えた。(北九州市立松本清張記念館蔵)

私たちは現代史に解決を与えねばならない――

「現代史を解決する」気概をもって、『国防婦人会』『兵たちの戦争』を世に問い、人びとへの共感と鋭利な知性をもって戦争と民衆の現代史を切り拓いた藤井忠俊。本書作集は自らが主宰した『季刊現代史』の諸論考に加え、戦争動員、松本清張、公衆衛生など多岐にわたる論考を網羅、集成。さらに『季刊現代史』総目次、著作目録、解説を附した決定版。「現代史にどう向きあうか」をつねにつきつける、藤井のことばが今、よみがえる――

藤井忠俊

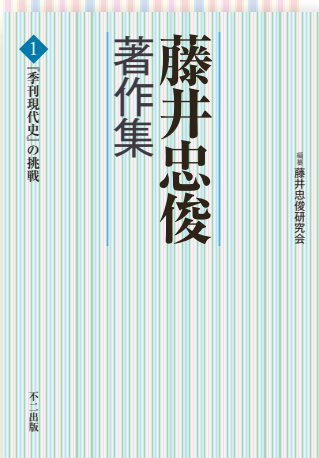
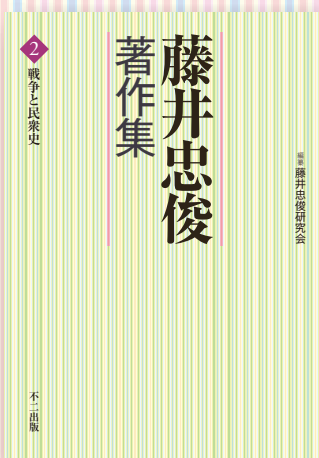
著作集

全2巻

編纂 藤井忠俊研究会

第1巻 『季刊現代史』の挑戦

第2巻 戦争と民衆史



推薦！ 武氏(京都大学) 駒込

A5判／上製／第1巻 608頁／第2巻 620頁

各巻定価(本体 6,800円＋税)／揃定価(本体 13,600円＋税)

ISBN978-4-8350-8328-5 C3036 (第1巻)／ISBN978-4-8350-8329-2 C3036 (第2巻)

不二出版

不二出版(株) 〒112-0005 東京都文京区水道2-10-10 TEL:03-5981-6704 FAX:03-5981-6705

藤井忠俊著作集 全2巻

藤井忠俊研究会 編纂

第1巻 『季刊現代史』の挑戦

第2巻 戦争と民衆史

各巻 本体 6,800円＋税

不二出版

ISBN978-4-8350-8328-5 (第1巻) C3036 ￥6800E

ISBN978-4-8350-8329-2 (第2巻) C3036 ￥6800E

帖合・貴店名／注文数

ご注文 年 月 日

お客様名

お電話番号

日本人はすべて

ファシストの下士官候補でもあったのだ

帝国史の側では
民衆史のモチーフと方法論を
咀嚼してきたのだろうか。
まったく不十分なのではないか。
……藤井忠俊の言葉は、
その不勉強に突き刺さる――

京都大学大学院教授 駒込武

色川大吉、鹿野政直、安丸良夫、ひろた・まさぎと連なる民衆史研究の動向と、一九九〇年代以降に勃興した帝国史研究の潮流はどのように総合されるのだろうか。民衆史の側では鹿野による伊波普猷研究があり、晩年のひろたは台湾における竹久夢二について論じた。それでは、帝国史の側では民衆史のモチーフと方法論を咀嚼してきたのだろうか。まったく不十分なのではないか。自戒を込めてそう感じる。「外地」にあると「内地」にあるを問わず「日本人すべては、ファシストの下士官候補でもあったのだ」「民衆動員について考えたこと」第一巻収録という藤井忠俊の言葉は、その不勉強に突き刺さる。およそ半世紀前の指摘である。自分自身をその一部として含むところの「現代史」を学び直す手がかりとして、『藤井忠俊著作集』の刊行をよろこびたい。

本書内容

第1巻 『季刊現代史』の挑戦

刊行にあたって

第一部 『季刊現代史』論考

第一章 現代史における「満州事変」の意味

なぜ「満州事変」をとりあげるか――その戦争の性格について――
「満州事変」と中国民衆の抵抗――反満抗日統一戦線の民衆的基礎――
編集後記（第一号）

第二章 日本ファシズム

民衆動員について考えたこと
編集後記（第二号）

第三章 日本敗戦

敗戦のなかの民衆像
編集後記（第三号）

第四章 現代史のなかの兵士像

兵士――軍隊に動員された民衆――
編集後記（第四号）

第五章 ファシズム形成と権力による民衆の組織化

権力による民衆組織化の前提と条件
編集後記（第五号）

第六章 日中戦争の全面拡大と民衆動員の展開

日中戦争における民衆動員の諸相と民衆の対応
編集後記（第六号）

第七章 治安維持法体制

治安維持法をめぐる対抗とその背景
編集後記（第七号）

第八章 国民教育の諸相とファシズム形成

教育のなかの国家と民衆――村を追って――
編集後記（第八号）

第二部 『季刊現代史』第九号（影印版復刻、抄録による）

『季刊現代史』第九号（一九七八年九月）

『季刊現代史』総目次

第2巻 戦争と民衆史

第一章 戦争と歴史学

近代日本の戦争動員とそのイデオロギー――
戦後史をめぐる歴史意識の変容――戦後を否定する論理とは何か――
戦後歴史学と戦争研究（歴博対談第一九回、鹿野政直（対談）
田中義一――対中強硬路線と治安維持法の発動者――
欠落した「松岡復権」と「歴史の見直し」との区別
〔書評 豊田譲〕松岡洋右悲劇の外交官〔上・下）

期待されざる皮相な人物の評伝に虚ろな読後感

〔書評 保坂正康〕東條英機と天皇の時代〔上・下）
民衆を軸に展開した現代史〔書評 菊地昌典〕一九三〇年代論 歴史と民衆〕

はじめに「戦争」ありき――国家総動員法五十年――
動員される人びと――在郷軍人会――

第二章

村と戦場〔共同研究〕近現代の兵士の実像――総論――
村発信の特異な在郷軍人分会誌――戦場と交信した「真友」の発見と分析――
日本ファシズムと民衆動員

在郷軍人会にみる国家と民衆の顔

市民と軍国主義の関係――在郷軍人会・国防婦人会の研究――

昭和初期戦争開始時における大衆的軍事支援キャンペーンの一典型――
軍用機（愛国号・報国号）献納運動の過程について――

第三章

女性たちと戦争――国防婦人会――

国防婦人会

自著を語る――「国防婦人会」――

国防婦人会 銃後と軍結ぶ

中国占領地における徴集と慰安所の展開

吉岡弥生著『婦人に与ふ』

〔書評〕岡野幸江・北田幸恵・長谷川啓・渡邊澄子編『わたちの戦争責任』

第四章

『日本の黒い霧』と社会問題

松本清張と『日本の黒い霧』

『日本の黒い霧』の時代認識と評価

日本の黒い霧――現代史への接近――
「黒地の絵」と帝銀・下山・松川事件諸作品の資料検証――

『日本の黒い霧』の今日的意味

水系をめぐる政治環境の変化――大正期前後における甲府盆地の政治過程――
〔書評〕高野義祐著『米騒動記』その四十周年を回顧して――

〔書評〕岡野加穂留編著

『福祉社会の未来構造論 未来福祉のための遺伝子組み換え試論』

第五章

健康と公衆衛生

日本の結核の進路をさぐる――公衆衛生学会シンポジウム日本の結核の将来より――

保健指導担当者への質問状

高齢化社会の性格を再考する

現代家庭の生態――司会のことば――

生活変化の実態・前説――司会のことばとして――

文明と健康を考える――司会のことば――

閉会挨拶（新しいライフスタイルをめざして）

現代日本人と肥満――司会者前説――

生活のリズムの変化をどうとらえるか――まとめ――

閉会挨拶（自ら管理する健康と健康支援）

『健康管理』の編集後記

藤井忠俊の現代史研究の軌跡（内田知行・米田俊彦）

藤井忠俊著作目録

『健康管理』特集記事一覧

藤井忠俊年譜

あとがき